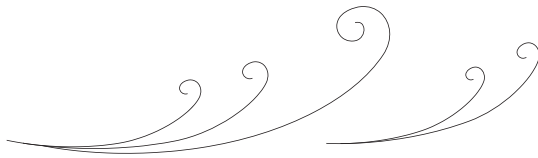


次の日は隣同士のベッドで「大丈夫？」と声を掛け合いながら治療を受けたので、いつもより早く楽に済んでしまったように思いました。彼女とは退院してからも家族ぐるみで悩みを話し合う関係が続きました。

私は医者から「完治はしないだろう」と言われています。今でも検査前日は神棚に手を合わせ「どうか無事に帰ってこられますように！」と祈ります。いつ再発転移するかもしれないという不安は、ずっと頭から離れません。

しかし、この地球上でたった一回きりの「自分」を、死ぬその時まで生きなければならぬと思っています。まだいっぱいしたい事やしなければならない事、私にも出来る事があると思えるからです。私の中には、最後まで生きぬかれたKさん Mさん Sさん、そして幼い息子のためなら命さえ惜しまなかった妹が今も生き続けて、時として励ましてくれています。そういう私も自分が生きていることで、誰かを励ませることができたならば、それは嬉しい限りです。



短歌「一步踏み出す」

穂積孝子



梅檀の花咲く季に癌告知受けし母さんわたくしもまた
夫や娘でなくてよかった癌告知すんなり胸に受け止めている
かわいげのない女やも癌告知受くるも涙一滴出ず
少年のようにスッパリ髪を切り癌と対峙の一步踏み出す
愛犬にミルクやりつつ言い聞かす入院のこと留守番のこと
リビングにはほたるぶくろと紫陽花のむらさき満たす入院の朝
ペタペタに筋肉落ちし脹脛ウオーキングの友を羨しむ
脹脛(ふくらはぎ)
点滴のポールを杖に歩みゆく長き病廊遍路のように